大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

『トリスタン』への道

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 嘉啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010033

『トリスタン』への道

伊藤嘉啓

(1)

「失敗した革命家ワーグナーもまた，同時代のおほくの人々と同様に，いまや，ショーペンハウアの思想の王国を前途にみつける.」(Hans Mayer: *R. Wagner*, S. 79)

1848年2月，パリに革命がおこつた．世界最初の社会主義革命といはれる2月革命である．この革命は，たゞちに近隣のドイツ諸国に波及した．その最大のものは，オーストリアのウィーンとプロイセンのベルリンでの政府側と民衆との衝突であり，それぞれ3月革命とよばれる．そのほかにも，ドイツかくちで，集会，反乱，暴動が多発した（バーデン，ヴュルテンベルク，ヘッセン＝ダルムシュタット，ナッサウなど）．1じは，全ドイツに革命の気運がみなぎつたが，6月，（チェコの）プラークでの革命が，キンディシュグレーツ（Alfred Windischgraetz, 1787-1862）将軍のひきゐるオーストリア政府軍に鎮圧されたのが転機となつて，保守勢力のまきかへしが，はじまつた．反革命である．さうして，ウィーンやベルリンでも，結局は，反革命が勝利をしめ，ドイツの革命は失敗にをはつた．

かつての革命の戦士たちを，ふかい挫折感がおそつた．このとき，かれらにとつて絶好の鎮静剤となつたのが，意志否定をとくショーペンハウアの哲学である．丁どそのやうに，ワーグナーもまた，49年5月のドレスデン暴動に参加し，失敗した革命家の1人として，ショーペンハウアになぐさめを見いだしたのだ，とハンス・マイヤーはいつてゐるのである．この説明は，とくに目あたらしくはなく，いはゞ，通説といつてもいゝやうなものである．

さらに，55年2月，服役中の，ドレスデン暴動のをりの同志レッケルに，ワーグナーがショーペンハウアの『意志と表象としての世界』をさし入れてゐるといふ事実も，この通説を補足してゐるかにみえる．しかし，ワーグナーとショーペンハウアとの関係は，やゝ別の見方もまた可能であるやうにおもはれる．

友人ヘルヴェークがショーペンハウアの『意志と表象』をもつてきたのは，1854年の9月か10月であつた．はつきりした日づけはわからない．ショーペンハウアのこの主著は，1819年にかゝれたのであるが，ながらく世間からわすれられた書もつであつた．それが，1853年，イギリスの「ウェストミンスター・アンド・フォーリン・クォータリー・レヴュー」誌にのつた紹介文によつて，急に人々の注目をひき，ドイツに逆輸入されたのである．この現象世界を無とみて，意志の否定こそ唯一の救ひである，といふ考へに，ワーグナーは，はじめどうしてもなじめないものを感じた．しかし，ショーペンハウアを手にしたのち，自分の『ニーベルングの指環』をよみかへし，とつぜん，ハッとおもひ当るふしに気づいた．ショーペンハウアのこの思想とおなじものが，すでに自分の作品にひそんでゐるではないか．たゞ自覚しなかつたゞけのことである．ワーグナーは『わが生涯』のなかで，この点にふれて，

「わたしは自分のニーベルンゲンの詩をみて，いまこの理論のなかで，わたしをとまどはせてゐるものが，自分自身の作品構想において，すでになじみぶかいものとなつてゐることがわかつて，びつくりした．かうして，わたしはこゝではじめて私のウォータン（『指環』全曲の主人公）を理解し，おどろいて，あらたに，ショーパンハウアのこの本のくはしい研究にとりかゝつた．」（Gregor-Dellin 編，S. 523）

1じ，ワーグナーはショーペンハウアにすつかりのめりこみ，その熱中度をしめす1例をあげれば，54年の秋から55年夏までの1年間に，この『意志と表象としての世界』を，なんと4回もくりかへし読んだといふことである．自分がよむだけでは満足できなくなつたワーグナーは，ハンス・フォン・

ビューローにも読むやうにすゝめてゐるし，獄中のレッケルにも，この本をさし入れしたほどである．このやうに，ワーグナーが周囲の人々にしきりにショーペンハウアをもちあげたので，チューリヒに，ワーグナーを中心とするショーペンハウア崇拝グループができあがつた．ヴィレ夫妻，ヴェーゼンドンク夫妻，カール・リッターなどである．このグループは，1854年すゑ，ショーペンハウアをチューリヒに招待しようとおもひたち，その旨のてがみをおくつた．しかし，ショーペンハウアはこの申出をことわつてゐる．もう世間から隠退して久しいこの老哲学者は，このとき，62歳，住んでゐるフランクフルトからチューリヒまでの旅はとほすぎるといふのであつた．それでワーグナーは，『指環』の私家版に，「尊敬と感謝をこめて」（Aus Verehrung und Dankbarkeit）といふことばをそへておくつた．ショーペンハウアは弟子のフラウエンシュテット（Julius Frauenstädt）へのてがみで，この「ワーグナーがそのうちに作曲するつもりの一連の4つのオペラ」について，それは「たぶん真の未来の芸術作品であるだらう．大へん夢幻的（phantastisch）なものらしい．まだ，序幕（『ラインの黄金』）をよんだゝけだが，先をつゞけて読むつもりだ」といつてゐる．翌55年に，フランソワ・ヴィレがショーペンハウアをたづねたときには，かれはヴィレにむかつて，ワーグナーは音楽家をやめたらいゝ，作家としての才能のほうがおほきい，と話したさうであるし，56年に，ワーグナーの代理としてショーペンハウアのところに使ひにだされたカール・リッターには，「ワーグナーがニーベルンゲンのなかで，伝説上の曖昧模糊とした人物を，人間としてわれわれにちかづけてくれたことは，驚歎にあたひする」といひ，「ワーグナーは詩人だ．音楽家ではない」と，こゝでもくりかへしたとのことである．この後者のはなしは，コージマの日記にも書いてあり（1869年1月16日），ワーグナーは，音楽家としてみとめられ，詩人として認められないよりは，まだ，ましだ，といつたと伝へられる．

一たい，ワーグナーは，なぜこれほどまでにショーペンハウアに沈潜したのか？　失敗した革命家の挫折感をいやすバルサム——ショーペンハウアと

ワーグナーとの関係は，たゞ単にさう考へるだけでいゝのか，どうか．

ワーグナーがショーペンハウアを手にとつた動機は，ヘルヴェークがもつてきて，よむやうにすゝめたからである．ヘルヴェークは，なぜ，この本をもち込んだか？ イギリスの雑誌に紹介記事がのつたのが発端となつて，急に人々がわすれられた思想家ショーペンハウアに関心をしめしはじめ，いはゞ，この本は話題の書だつたからである．かうして，ワーグナーは，まづ，時代思潮の影響から，この哲学書をよみはじめるのである．しかし，ワーグナーはすぐにはこの思想になじめなかつたが，よんでゆくうちに，この思想は自分には既知のものであり，もうすでに，自分の作品のなかで表現してゐることである，と気づく．ワーグナーはショーペンハウアについて，いろいろのところで，何どもくりかへし，さう説明してゐるのであるが，さうではなかつた，といふ解釈もある．ハンス・マイヤーなどは，ワーグナーはショーペンハウアを知る以前から，ショーペンハウア主義者だつたわけではく，ワーグナーがさうなつたのは，やはりショーペンハウアを知つてからである，といふのである．これは，一見，ワーグナーの発言と矛盾してゐる．しかし，ワーグナーが「すでに自分の作品のなかで」といふばあひの，「自分の作品」は，具体的には，『指環』をさしてゐるのに対し，ハンス・マイヤーが，それまでのワーグナーの作品とするのは，初期作品から『ローエングリーン』までゝあり，これらの作品では意志肯定（Willensbejahung），世界変革（Weltveränderung）が特徴であり，いさゝかもショーペンハウア的ではない，と見てゐるのである．ワーグナーはショーペンハウアを知つてから，たしかに，一おう完成してゐた『指環』のテキストの結末の部分を書きなほした．この改訂版が，いま普通に私たちがみてゐるところの『指環』である．この作品の内包する前後矛盾は，ショーペンハウア主義者でなかつたワーグナーが書いた台本を，ショーペンハウア色に1部改変したゝめである，とハンス・マイヤーはいふ（H. Mayer: *R. Wagner*, S. 81 f.）．

こゝでわたしが問題にしようとするところは，ハンス・マイヤーとは，すこし重点をおく場所がことなる．ワーグナーがあれほどまでにショーペンハ

ウアにひかれた他ならぬその原因が，まづ当面の課題である．

ワーグナーは，1854年1月，リストにあてゝ，「小生は，なほたゞ1つの希望を知つてゐます．それは眠りです．生の苦痛の一切の感覚をなくしてくれるふかいふかい眠りです」（1月15日）と書いてゐるし，そのすこし後にも，レッケルへのてがみで，「すべてのものには，をはりがあります．神々にも黄昏がほのめいてゐるのです．だから，その指環をすてるやうにと，忠告するのです」といふエールダの歌を引用し（『ラインの黄金』第4ば），それにつゞいて，「われわれは死ぬことを学ばねばなりません．それも，ことばのほんたうの意味での死ぬことをです，をはりへのおそれは，あらゆる無慈悲の根元です」（1月25/26日）と，いつてゐる．これらの手紙は，ショーペンハウアを知る約10ケ月まへに書かれてゐる．ショーペンハウアをよむ以前に，あきらかに，ワーグナーには死へのあこがれがあつた．

ショーペンハウアを手にしたのが，9月か，10月，さうして，はやくも10月すゑには，『トリスタン』を着想してゐる．その年の12月なかば，リストにあてゝ，

「私は音楽の仕事をゆつくりとすゝめてゆくのと平行して，最近は，もつぱらある人物にかゝはつてゐます．その人は——たゞ著作のうへでだけですが——天のたまものゝやうに私の孤独のなかにやつてきました．アルトゥール・ショーペンハウアです」と，ショーペンハウアへの感激をのべ，

「ショーペンハウアの主想は，生への意志の決定的な否定であり，おそろしいほど真剣でして，たゞこれだけが救ひをもたらしてくれます．このやうな思想は，もちろん，私にとつて目あたらしいわけではないのですが，一たい，いかなる人でも，自分がすでにそこに生きてゐる思想しか考へられないものです」と，その思想を要約したうへで，

「私は眠れぬ夜に，たゞそれだけが眠りへと導いてくれる鎮静剤をみつけました．死へのこゝろからの，切なる願望です．すなはち，完全な無意識，全くの無，あらゆる夢の消滅——これが，唯一の最終的な救ひです」と，死へのあこがれを端的にかたり，さらに，このながい手紙では，トリスタン構

想にもふれて，

「しかし，私は生涯で，いまゝでに，愛のほんたうの幸福をあぢはつたことがありませんので，この数おほくの夢のなかでも1ばん美しい夢のために，1つ記念になるやうなものをつくりたいのです．そこでは，はじめから終りまで，愛が十分にみたされなくてはなりません．と，いふのは，私は頭のなかにトリスタンとイゾルデを計画したのです．単純きはまりないが，純粋に音楽的な主題です．をはりの場面で，たなびく黒い旗で，私は自分をつゝみたいとおもひます——死ぬために」と，こゝでも死について語つてゐる．

翌55年1月に，ワーグナーは，かねて作曲してあつた『ファウスト序曲』を改訂したのであるが，そのとき，『ファウスト』第1部の1566—71行までを引用して，この改訂版のモットーとするつもりであつた．すなはち，つぎの箇所である．

己の此胸のうちに住んでゐる神は
心の深い底まで掻き乱すことは出来るが，
己のあらゆる力の上に超然と座を占めてゐる神は，
外界の物を何1つ動かすことが出来ぬ．
それで己には世にあるのが重荷で，
死が願はしく生が憎いのだ．（鷗外訳）

ワーグナーが，ながい『ファウスト』のなかゝら選びだしたのは，よりによつて，死への願望のことばであつた．たゞし，この引用は，改訂版『ファウスト序曲』のモットーとはならなかつた．ワーグナーは一たんモットーとしようとした『ファウスト』からの引用をとりやめ，そのかはりに，マティルデへの献辞（「愛する女ともだちの記念のために」）でおきかへた．

ワーグナーは，なぜ，このやうに集中的に，死への願望をかたるのか？

（2）

この時期のワーグナーに，目だつて指摘できるもう1つの事柄がある．か

らだの不調——または，不調の訴へである．1850年3月，自作オペラ上演の機会をつかまうと，ワーグナーはパリにいつてゐたのであるが，そこから，チューリヒの妻ミンナにあてゝ，「心臓の圧迫感」(Herzbeschwerden) を訴へてゐるし，51年9月には，丹毒と便秘のために，アルビスブルンで水治療 (Hydropathie od. Hydrotherapie) を受けてゐる．ワーグナーは15年まへにも (1834年11月)，ひどい丹毒にかゝつてゐるが，それは，丁ど，マグデブルクで（ベートマン劇団の）音楽監督の地ゐにつき，はじめて自立して間もなくのころである．顔は赤くはれあがつて，不恰好にゆがんだ．そのワーグナーをかひがひしく看病してくれたのが，知りあつて間もない女優ミンナ・プラーナー，のちのミンナ・ワーグナーであつた．丹毒は，一たん，をさまつて，しばらくは顔をださなかつたが，この51年秋になつてふたゝび発病，これ以来，この病気はすつかりワーグナーの持病になつてしまひ，いご，しばしばこの病気になやまされる．

52年3月，姪のフランツィスカ（兄アルベルトのむすめ）にあてゝ，「いつも神経を病んでをり，たぶん長いことはないだらう」といひ，その年の9月，友人キーツへの長文のてがみでは，興奮と疲労，頭はいらいらして集中できず，憂鬱，あらゆる仕事へのおそれ，そして，ぐつたりしてゐて，散歩もきはめてゆつくりしかあるけない」といひ，更につゞけて，「小生が，貴兄の想像するやうな意味で，元どほり元気になれないのは，火をみるよりあきらかです．なぜなら，小生は『精神』を病んでをり——『精神』は不治の病なのです」と，大へん悲観的である．とくに，「不治の病」(eine inkurable Krankheit) といふやうな表現にそれがあらはれてゐる．11月には，リストにあてゝいつてゐる．「こゝでは，小生は間もなく駄目になつてしまふにちがひありません.」

亡命生活からくる窮屈さ——精神的な息ぐるしさも，いくらかの原因とはなつてゐるであらう．しかし，主因は別のところにあつたと考へられる．大たい，ワーグナーのチューリヒでの生活は，一ぱんの「亡命生活」といふことばの概念には，あてはまらぬ「優雅な生活」であつた．ドイツ諸国への入

国は禁じられてゐたものゝ，ワーグナーを崇拝するおほくの人々——たとへば，ヴィレ夫妻，ヴェーゼンドンク夫妻，リッター母子などに取りかこまれて，経済的にも，オットー・ヴェーゼンドンクやリッター夫人から援助をうけ，それは裕福とさへいへるほどのものであつた．すこし時期がずれるが，54年3月23日付のウィーン警察の秘密報告がのこつてゐる．それによれば，ワーグナーはチューリヒで，たゞ豪勢にくらしてゐるばかりでなく，法外な値段の金時計など高価なものを購入してゐる．住まひは，立派な家具，じゆうたん，絹のカーテン，シャンデリアで飾られてゐるものだから，あの1もんなしでこのチューリヒに流れてきたをとこが，どこからそんな収入があるのか，みんな不思議がつてゐる．(W. Lippert: *R. Wagners Verbannung u. Rückkehr*, S. 45)

55年2月26日，ワーグナーはチューリヒを出発して，ロンドンにむかつた．そこの旧音楽協会（The Old Philharmonic Society）から招待されたからである．ロンドンに到着したのが，3月2日．ワーグナーはこの英都に，3月はじめから6月すゑまで，やく3ケ月滞在，都合8回のコンサートをひらき，モーツァルト，ベートーヴェン，ヴェーバーなどの作品を指揮してゐる．自作の『タンホイザー』序曲も演奏された第7回めのコンサートには，ヴィクトリア女王夫妻も臨席され，ワーグナーをロイヤル・ボックスによび出して，挨拶までうけられた．

しかし，ロンドンでのワーグナーの評判は概してあまり芳しくなかつた．そのおもな原因は，大たい，2つにまとめられる．(1)そもそも，ワーグナー招聘の発議が，イギリス人によるものではなく，このオーケストラのコンサート・マスターであるフランス人サントン（Prosper Sainton, 1813—90）であつた点が1つ，それに，サントンがワーグナー招聘をおもひ立つた動機がまた奮つてゐる．サントンは，これほどはげしい非難の的となつてゐる音楽家は，何かあるにちがひない，と判断し，それなら招かうとおもつたのであつた．(2)もう1つは，イギリス第1の有力紙「タイムズ」と有名な音楽紙「ミュージカル・フィールド」の両紙の音楽担当記者デイヴィスン（James

William Davison, 1813—85）がワーグナーを徹底的に攻撃したからである．

デイヴィスンのワーグナーにたいする反感は，ワーグナーのロンドン到着ごにはじまるのではなく，すでにワーグナーがチューリヒを出発するまへから耳にしてゐた．ワーグナーはロンドンにつくやいなや，チョーリイ（Henry Chorley, 1808-72）とデイヴィスンの2人の批評家には，あいさつしておくやうにと忠告をうけた．しかし，ワーグナーはそれをきつぱりと拒否してゐる．

「こゝで私はアレコレの人，たとへばデイヴィスン，チョーリイなどをたづねておいたはうがよいとの忠告をうけました．この連中は，ゴロツキで無能だが，しかし，とにかく，かれらは影響力をもつてゐるといふのです．私の能力と才能とをこゝで無益に浪費するのは，残念だといふわけです．このことについて，貴兄がどうご判断になるかわかりませんが，私はこゝで自分の全才能をかけて何かをもとめるといふやうなことではないとおもつてをりますので，そのためにゴロツキのすゐせんは必要ない，とおもつてゐる次第です．」（オットー・ヴェーゼンドンクあて書簡，55年3月20日）

ロンドン滞在中のワーグナーの健康状態はどうだつたか．1ことでいへば，あひかはらず，具合がよくない——あるいは，より正確には，具合がよくない，とおもひ込んでゐた，といふべきかもしれない．

4月17日，ミンナにあてゝ，「ざんねんながら，今また，眠れぬ毎夜々々をすごしてゐる」と，「また」といふことばを使つてゐるのは，このころのワーグナーをしばしば不眠が襲つたことをあらはしてゐる．それから，ワーグナーはロンドンにダンテの『神曲』をもつてゆき，それを読んでゐたのであるが，そのなかの地獄（Inferno）の描写と現在の自分の生活状態とをかさね合せて，5月16日，リストへ，「ぼくはこゝで，地獄におちた人間のやうに生活してゐます」と訴へてゐる．

ドイツでは「おたづね者」であるワーグナーが，（デイヴィスン，チョーリイ等から非難されたとはいへ），ヴィクトリア女王に拝謁までたまはる光栄によくし，演奏会も一おう成功したにしては，すこし悲観的にすぎるのでは

ないか？　さうして，ロンドンからかへつてからも，ワーグナーの気分はさえない．「外界との接触のすべてが，たゞ厭になるばかりですし，気がかりの種にほかなりません．」（リストあて手紙，55年9月）

秋には，ロンドンの疲れがでたのか，れいの丹毒がまたまた発病してゐる．このときの様子を，ワーグナーはリッター夫人にあてゝ，「生活の刺から顔のばら（Gesichtsrose）が咲きだし，自分はよき園丁となつて3ケ月をすごさねばなりませんでした」と知らせてゐる（55年12月29日）．

（54年10月にミンナがドイツに出かけてこゝろみた恩赦願ひは，失敗にをはつたので），56年春，ワーグナーはふたゝび恩赦をねがはうとおもひ立つた．まづ，ワイマルのリストにたのみ，ワイマル大公カール・アレクサンダーからザクセン国王ヨハンにはたらきかけようとしたのである．リストはワーグナーのたのみを，カール・アレクサンダー大公にとりつぎ，ワーグナー自身からも直接ヨハン王にねがひ出るやうにといつた．リストからたのまれたカール・アレクサンダーは，そのむねをヨハンにつたへたが，4月25日のヨハンからカール・アレクサンダーへのてがみによると，ヨハンはその申出をきつぱりことわつてゐる．しかし，カール・アレクサンダーはそれをリストにつたへなかつたらしく，5月16日，ワーグナーはヨハン王に長文の恩赦願ひを提出してゐるが，もちろん，きゝいれられなかつた．

同日，5月16日，ワーグナーは『勝利者』（Die Sieger）と題する短い構想メモをかきつけてゐる．これは，しばしばの丹毒発病のため『ワルキューレ』の作曲がすゝまず，病中のなぐさみに手にとつたフランスの東洋学者ビュルヌフ（Eugène Burnouf, 1801-52）の『仏教史入門』（*Introduction à l'histoire du Bouddhisme*）から着想したのであつた（『わが生涯』S. 541）．ワーグナーのこの読書は，ショーペンハウアの影響でインドに興味をもつた結果であるといはれる．

チャンダラ（漢訳仏典では「旃陀羅」，4姓にふくまれぬ賤民）階級の乙女プラクリティは，ある日，泉のほとりでブッダの弟子アーナンダ（バラモン階級）に水をくんであげたのを機会に，はげしい恋におちた．プラクリティ

はもとバラモン階級の王のむすめであつたが，チャンダラ階級の王子の求婚をあざ笑つてしりぞけたがために，チャンダラ階級のむすめとして生れかはり，かつての傲慢をつぐなふために，かなはぬ恋をたへねばならぬ運命にあつた．ブッダから自分の前生をゝしへられたプラクリティは，自分の運命を甘受すべく，ブッダの教団に入り，アーナンダは彼女を妹としてむかへる．

ワーグナーはこの諦念のエピソードに興味をもち，作品にしようと，ながいあひだあたゝめてゐたが，結局は『パルジファル』のなかに解消されたやうなかたちとなり，独立の作品とはならなかつた．

5月なかば，またまた丹毒が発病，何と13回めの発病といふ．6月5日，空気治療（Luftkur）の場所をさがしにチューリヒを出発，6月7日，ジュネーヴに到着，モンブランちかくのモルネの水治療所をすゝめられたので，そこをたづねると，モルネの水治療所の医者は，ワーグナーの病気を，丹毒ではなく，神経性アレルギー（nervöse Allergie）と診断した．

丹毒とは連鎖状球菌によつておこる病気であり，アレルギーではない．アレルギーは，元来，無害なはずのものに，人体が過敏に反応する症状であり，原因（アレルゲーン）には，食餌性，薬物性，機械性．．．などゝ並んで，心因性もまたその1つにかぞへられてゐる．丹毒に似たアレルギーといへば，たとへば，じん麻疹などがそれにちかいかもしれない．（心因性じん麻疹といふ病気はある．）とにかく，ワーグナーの病気は，連鎖状球菌によつておこる丹毒とは，全く別ものであり，精神的なストレスから来てゐるものといふことになる．それでは，ワーグナーには，一たい，どんなストレスがあつたのか？

（3）

「丹毒」の最初の発病は，1834年11月であり，それは（マグデブルクで）ベートマン劇団の指揮者になつた直後，つまり，ワーグナーがはじめて就職して間もなくの時期であつたから，相当にストレスがたまつてゐたであらう

と想像されるし，そのストレスが病気を誘発した可能性はあるであらう．

しばらくをさまつてゐたこの病気が，久しぶりに再発したのが，51年．それは49年のドレスデン暴動に加担したゝめに，ザクセン王国の官憲におはれる身となり，いのちからがら国外にのがれ，何とかスイスに亡命の地をさがしたものゝ，それまでの宮廷指揮者（Hofkapellmeister）の地ゐをうしなひ，革命には失敗し，自作上演のめどはたゝぬ失意の時期であつた．さうすると，このときのワーグナーのストレスは，革命の失敗と亡命が引きおこしたものなのか？

もともと，ワーグナーが革命軍に味方したのは，現今の堕落した芸術は，堕落した社会の産物にほかならず，真の芸術をうみ出すためには，まづ，社会機構の変革からはじめねばならぬ，といふ考へにもとづいてゐる．かうして行動に出てみたものゝ，革命は失敗にをはつた．ワーグナーは，たゞちに，『芸術と革命』『未来の芸術作品』『オペラとドラマ』などの論文をかき，これによつて革命の代替品をつくつた．ワーグナーに関するかぎり，これらの著作によつて，革命の失敗はおほむね止揚された，といつてもいゝやうにおもはれる．49年5月の革命から2年もたつてゐる51年夏の心因性病気の心因は，まづ，革命の失敗とは関係ないであらう．あるいは，より希薄な関係しかもたないであらう，とわたしは考へる．ハンス・マイヤーは，54年秋のショーペンハウアとの共鳴までも革命の挫折とむすびつけるが，傷のいたみをいやすために，負傷してから5年ごに鎮痛剤がとゞいたといふのでは，どう見ても，いさゝかおそ過ぎはしないであらうか．心因性病気の心因といひ，ショーペンハウアとの共感といひ，その原因は，たゞ単に，何でも革命の失敗に関聯させるのではなく，それとはまた別のところに探すはうが，よりおほくの妥当性をもつやうだといつても，あまり大きな誤りはをかさないですむのではないか．

この時期のワーグナーの健康状態を，肉体，精神両面から，もう1ど復習しておくと，50年ごろから，心臓がくるしいとか，顔に赤い発疹があるとか，便秘とか．．．などの肉体上の不調の訴へが目だちはじめ，ついで，52

年くらゐから，精神・神経の領域にもおよび，「『精神』を病んでゐる」とか，「あらゆる仕事へのおそれ」とか，いひ，さらに54年になると，「生の苦痛が消滅する深い眠り」にあこがれ，「死」を学ばねばならぬところまで行きつく．

仕事の量の面からは，どうか？　スイスに亡命した49年夏から，早速，『芸術と革命』にとりかゝり，以下，次々と『未来の芸術作品』『オペラとドラマ』など，ワーグナーの散文作品の重要なものは，この2年ほどのあひだに集中的に執筆されてゐる．その後も，やすむ間もなく，『ジークフリートの死』を『指環』に拡大する仕事——すなはち，『若いジークフリート』『ワルキューレ』『ラインの黄金』と立てつゞけに書きまくり，52年12月には，『指環』の全台本が完成してゐる．49年なかばから52年すゑまでの3年半は，ワーグナーにとつて，きはめて多産な時期といつていゝ．革命の挫折感にうちひしがれて意気銷沈してゐたとは，とてもおもはれない．

ところが，53年に入ると，一転して，活動は急速におとろへる．『指環』の台本を完成しをへた53年のはじめ頃，ワーグナーは「全く気分がすぐれず」，1月3日に（ドレスデンで）死んだ親友ウーリヒの跡をおつて，自分は死ぬのではないか，と不安になるほどであつた．（ヴェステルンハーゲン『ワーグナー』，白水社，243頁）．

ワーグナーのつぎの仕事は，『指環』——とくに，その序幕にあたる『ラインの黄金』に作曲することであるが，なかなかそれに手をつけず，気分転換のために，この年の8月，ワーグナーはイタリア旅行に出かける．費用はオットー・ヴェーゼンドンクからの援助である．この旅の途中，ラ・スペツィア（La Spezia，リグリア海に面した中都市，ジェノヴアの東南やく100キロ）で，ワーグナーは不思議な体験をあぢはつた．ワーグナーがラ・スペツィアに到着したのが，9月4日．こゝに来るまへの滞在地ジェノヴアで赤痢にかゝり，熱まで出て気分がわるかつた．ラ・スペツィアについても，発熱と不眠のため不快な夜をすごしたのち，翌9月5日，ワーグナーは街へ散歩にでた．しかし，散歩も気分をかるくしてはくれなかつた．疲れきつて宿にかへ

り，かたい長椅子によこになつてねむらうとしたが，眠りはおとづれず，そのかはりに夢遊病（somnambul）のやうな状態におちいつた．ワーグナーは，はげしくながれる水のなかに沈みこむやうな気持になり，水のざわめきは，やがて変ホ長調の旋律となつてひゞいた（曲ではコントラバスがひく）．山のやうな大波がおそひかゝつてきて，それがくだけたかとおもつたら，ハッとして，ワーグナーは我にかへつた．さうして，はつきりと，それが『ラインの黄金』の前奏曲であるとわかつた（『わが生涯』，S. 511 f.）．

ワーグナーはいはゆる「天才型」ではなく，このやうに思ひがけぬインスピレーションがおとづれたことは，あとにもさきにも例を見ず，このときだけである．おそらくは，赤痢のために食物もほとんど摂つてゐなかつたらうし，それと発熱のために，一種の断食状態が引きおこした幻覚だつたであらう．

ラ・スペツィアでのこの異様な体験のゝち，ワーグナーは，早速，チューリヒの妻ミンナにあてゝ，仕事部屋を片づけておくやうに，と電報をうつた．ワーグナーは，翌9月6日，ラ・スペツィアをたつて，いそいでスイスの自宅にかへる．折角おとづれたインスピレーションがにげてゆかないうちに作曲にとりかゝらうといふつもりであつたが，しかし，実際には，すぐには仕事に手をつけなかつた．

10月6日，ワーグナーはバーゼルにゆく．これはまへからの約束にしたがつたので，こゝで，リストやビューローに会ふためであつた．かれらは，カールスルーエの音楽祭からのかへり道だつたのである．10月9日，ワーグナーはリストとその愛人ザイン＝ヰトゲンシュタイン（Fürstin von Sayn-Wittgenstein, 1819—87）と一緒にパリにゆき，翌10月10日には，3人のむすめをつれたリストと夕食を共にしてゐる．この3人のむすめとは，リストとマリー・ダグー（Marie d'Agoult, 1805—76）とのあひだに生れた子供たちであり，そのなかの1人が，コージマである．コージマは，このとき15歳．これがワーグナーとコージマとのはじめての出あひであつた．（2年ご，コージマはハンス・フォン・ビューローと結婚する．）パリで，ワーグナーはマイ

ヤーベーアのオペラ『鬼のロベール』(Robert le Diable)を見たり，自作の『指環』の朗読をしたりしてゐる．『指環』の朗読会には，ベルリオーズも出席した．

10月20日には，ミンナもパリにきて，ワーグナー夫妻がチューリヒにかへつたのは，10月28日．ワーグナーがやうやく『ラインの黄金』の作曲にとりかゝつたのは，何と11月1日である．あのラ・スペツィアのインスピレーションから，2ケ月ちかくもたつてゐる．なぜ，ワーグナーは作曲にこんなにも手間どつたのか？　この年の12月，リストあての書簡のなかで，ワーグナーは，「何しろ，5年間も作曲しなかつたから」といひ，なかなか調子が出ないのは，長いあひだ，作曲から遠ざかつてゐたせゐにしてゐるのは，かへつて，いひわけが目立つ．事情は，何となく気のりしなかつたゝめであり，それは，ワーグナーの気が滅入つてゐたからであつたであらう．

かうして，53年は，ほとんど何の成果もなくすぎ，54年，55年，56年，57年夏までの4年半のあひだにした主な仕事は，『ラインの黄金』と『ワルキューレ』の総譜を完成し，『ジークフリート』の第2幕途中までの作曲をしたにすぎない．2つの時期（49年7月—52年末，53年初頭—57年6月）の仕事の量を比較してみれば，あきらかに後者のはうが著しく低下してゐる．

以上，3つの点，すなはち，(1)肉体的な不調，(2)精神的には憂鬱，そして死への思ひ，(3)仕事の量の減少から考へて，ワーグナーは，おほよそ，52年あたりから56年くらゐにかけて，初老期「うつ」の状態だつたのではないかとおもはれる．1852年は，ワーグナー，39歳であり，年齢からみても，ぴつたりあてはまる．

さうすると，ワーグナーとショーペンハウアとの関係も，まへにあげたハンス・マイヤーなどの説とは，いくらか違つた見方ができる．ショーペンハウアは，失敗した革命家ワーグナーの挫折感をいやす鎮静剤であつた，といふのが，ハンス・マイヤーらの説明であつたが，ワーグナーが『意志と表象としての世界』をよんだのが，54年秋であり，革命から5年ごであつて，それでは鎮静剤がとゞくのが，あまりにもおそすぎるであらう．ワーグナーが

ショーペンハウアにいたく共鳴したのは，自分が「うつ」状態に陥つてゐたので，この意志否定の思想とワーグナーとの波長が，うまく合つたゝめではないか，とおもふのである．一ぱんに，ある著書が，ある人におほきな影響をあたへたばあひ，その人がいつそれを読んでもおなじ結果になるわけではなく，たとへば，5年はやく読んだら，あるいは，5年おそく読んだら，何の影響もうけないでしまふ可能性もあり得る．丁ど，読むべきときに読んで，はじめて効果が出るのである．ワーグナーとショーペンハウアのばあひも，まさに都合よく，ワーグナーがショーペンハウアの思想をうけ入れやすい体勢のときに，この本を手にとつたのであつた．「その人は，天のたまものゝやうに私の孤独のなかにやつてきた」とワーグナーはリストに書いてゐるが，この言葉にも，そのころのワーグナーの心理がよくあらはれてゐる．「天のたまものゝやうに」とは，まさにうつてつけといふ気もちがにじみ出てゐるし，それが「私の孤独のなかにやつてきた」と「孤独」といふことばをつかふ．なぜ，そんなにも孤独なのか？「亡命」から，私たちが聯想する生活とワーグナーのスイスの生活とは，大いにかけはなれてゐた．先に引用した警察の秘密記録からもわかるやうに，ワーグナーのスイスでの生活は，まはりの人々がどこから収入があるのかと不思議がるほど豪華なものであつたし，人的交遊もなかなかにぎやかである．リッター夫人やオットー・ヴェーゼンドンクなどの経済援助を惜しまぬ保護者もあり，芸術上では，リストといふ親友がをり，チューリヒとワイマルとにはなれて住んでゐるとはいへ，ときどき会つてもゐるし，てがみのやりとりは頻繁にあり，そのほかにも，ヴィレ夫妻，カール・リッター，ハンス・フォン・ビューロー，マティルデ・ヴェーゼンドンクなど，自分を崇拝する者たちを，あたかも衛星のごとくしたがへてゐる．私たちが，今日見る巨人ワーグナーにくらべれば，まだまだ世に認められてゐなかつたけれど，客観的にみて，決して「孤独」ではなかつた．ワーグナーの生涯から「孤独」な時代をさがせば，スイス時代よりはむしろ，（1839年から42年までの）パリ時代こそ，この言葉にふさはしいであらう．このときは，ワーグナーの「飢餓の時代」ともよばれ，ワ

ーグナー，アンダース，レールス，キーツなどのそれぞれに何かうしろめたい過去をもつらしいドイツ人同士が，同国人のよしみで身をよせ合つて，お互に細々と憂さばらしをしてゐたのである．スイス時代は，このパリ時代とは，大いに様子がちがふ．それなのに，「孤独」だつたのか？　ワーグナー自身が，さういつてゐるのであるから，間違ひなく「孤独」だつたのである．どうして？

ワーグナーがショーペンハウアを手にしたのが，54年秋．それより先，その年の1月に，レッケルにあてゝ，「われわれは死ぬことを学ばねばなりません．それも，ことばのほんたうの意味での死ぬことを」と書き，リストにも，「死へのこゝろからの，切なる願望．．．すなはち，完全な無意識，全くの無，あらゆる夢の消滅——これが，唯一の最終的な救ひ」といつてゐるのでもわかるやうに，ワーグナーは『意志と表象』をよんではじめて，死の思想をいだいたのではなく，すでに十分に「孤独」のなかで，死の思ひに沈んでゐたときに，ショーペンハウアをよんだから，あれほどまでに感銘をうけたのであり，この「孤独」感は，死への親密とならんで，初老期「うつ」の症候となるであらう，とおもはれる．

（4）

この時期のワーグナーにもう1つ，どうしてもふれておかねばならぬことがある．それはマティルデ・ヴェーゼンドンクとの関係である．1852年1月ワーグナーはチューリヒで3回，ベートーヴェン・コンサートを指揮してゐる．このコンサートをきいて感動したヴェーゼンドンク夫妻は，2月なかば，ワーグナーのドレスデン時代の友人であるビーバーシュタイン（Marschall von Bieberstein）の家で，ビーバーシュタインは，元来，弁護士で，ドレスデン革命のときのワーグナーの「戦友」の1人であり，かれもまた，スイスに亡命し，チューリヒでは，バーゼルの生命保険会社の総代理人などをしてゐたのだが，そのビーバーシュタインの家で，はじめてワーグナーと

知合ひとなつた．これがワーグナーとマティルデとの運命的な出あひの発端だつたのである．夫のオットー・ヴェーゼンドンクは，ニュー・ヨークに絹織物の会社をもつ富裕な商人であり，このとき，37歳（ワーグナーより2歳年少），妻マティルデは23歳（ワーグナーより15歳年下）であつた．2人はもともとデュセルドルフの出身であり，1848年に結婚（オットーは再婚），チューリヒには51年すゑに引越して来たのであるから，引越といつても，ホテル住まひであつたが，こゝに来て間もなく（52年1月），ワーグナーと知合つたのである．後年，マティルデは当時を回想して，「53年に入つてから，だんだん親しくなりました．．．はじめ，あの方は3つのオペラ台本を読んでくださいました．それが私を魅了したのですが，それから，その前書き，さうして，散文のものを次々に，といふ具合でした」と，いつてゐる（Allgemeine Musik-Zeitung, Berlin, 14. Feb. 1896）．

ワーグナーのはうは，マティルデをどう思つてゐたか？　53年5月18日，20日，22日（ワーグナーの誕生日）の3回，チューリヒでワーグナーの40歳祝賀コンサートが開かれた．『リエンツィ』『オランダ人』『タンホイザー』『ローエングリーン』からの抜萃曲が演奏されたのであるが，これが最初のワーグナー・フェスティヴァル（Wagner-Festspiele）であるといはれる．ワーグナーは，一おう，この公演に満足し，「この祝祭全体を，ある美しい婦人の足許にさゝげた」とリストへのてがみにかいてゐる（53年5月30日）．「美しい婦人」とは，いふまでもなく，マティルデである．

おなじ5月には，マティルデのために，ポルカ（Polka G-dur）も作曲してゐるし，6月には，有名な「マティルデ・ヴェーゼンドンクのためのソナタ」（As-dur）を書き，これには「あなたは，これからどうなるか，ご存じですか？」（Wißt ihr wie das wird？）といふ，（のちになつて見れば，意味深長な），なぞのやうなモットーまでそへてゐる．

この年の7月から8月にかけて，ワーグナーはゲーテの『西東詩集』と『親和力』とに読みふけつた．マティルデとの関係を考慮にいれてみると，ワーグナーがこのとき，ゲーテとマリアンネ・ヴィレマー（Marianne Wille-

mer, 1784—1860）との恋愛問答歌から生れたといふ『西東詩集』と1組の夫婦が，それぞれに，夫は別の女性に，妻は別の男性に惹かれてゆく過程をとりあつかつた『親和力』とを手にとつたのは，単なる偶然ではなく，ワーグナーはそこにアナロジーを求めてゐたのであつたかもしれない．とくに，『親和力』は，わかいころに1ど読んでをり，このときは再読だつたが，「今度は文字どほり1語々々この本を理解した」とワーグナーがいつてゐるのも（『わが生涯』，S. 510），私たちにそのやうな推測を一そう強めさせる．

54年になると，リッター夫人へのてがみでも，マティルデにふれて，「やさしい女性が，私に誠実で献身的であつてくれます」と書いてゐるし（54年1月20日），この年の6月28日から9月1日にかけて，『ワルキューレ』第1幕の作曲スケッチを作つた際には，その短い前奏曲に，G. s. M. と3つの頭文字をそへた．Gesegnet sei Mathilde！（マティルデに祝福あれ！）の略語であり，こゝではじめて，（略語とはいへ），はつきりとマティルデといふ名まへを出したのである．たゞ，これだけではなかつた．ワーグナーは『ワルキューレ』作曲をすゝめていくうちに，その第1幕の要所々々に，冒頭のもふくめて合計16の暗号化した略語によるコメントをつけたのである．たとへば，第1場のをはりのト書，ジークムントとジークリンデが，ふかい感動のうちに，おたがひの目と目をみつめ合ふ場面には，L. d. m. M ?? (Liebst du mich, Mathilde？）（マティルデ，あなたは私を愛してますか？）と書いてゐるし，さらに，フンディングにうながされて，ジークリンデも奥の寝室にひきさがつたあと，第3場のはじめ，1人のこされたジークムントは，心中大いに興奮しながら，じつと物おもひにふけるが，その箇所には，G. w. h. d. m. verl ?? (Geliebte, warum hast du mich verlassen？）（愛する人よ，どうして，あなたは私をおきざりにしたのですか？）と書き込んである（E. Newman: *The Life of R. Wagner*, II, S. 526 参照）．これで見ると，ワーグナー＝ジークムント，マティルデ＝ジークリンデ，オットー・ヴェーゼンドンク＝フンディングといふ類推の構図が，ワーグナーの意識のなかにあつたことがわかる．

ワーグナーの気持がこゝまでマティルデに傾斜すれば，ミンナがそれに気づかないはずがなく，そのためでもあらうか，ミンナは心臓を病みだし，6月のすゑ乳精療法（Molkenkur）のためゼリスベルク（Sälisberg）へ出かける．結局，ミンナは，12年ごの66年に，「心臓」のために死ぬのであるが，このときが，病気のはじまりであつた．間もなく，ワーグナーはショーペンハウアを知り，はやくも年末には，『トリスタン』の構想を得てゐる．

一ぱんに，『トリスタンとイゾルデ』は，ショーペンハウアの哲学との邂逅と，マティルデ・ヴェーゼンドンクとの恋愛といふ2つの体験から生れた作品だとされてゐる．この説を根拠にして考へれば，このころすでに，ワーグナーとマティルデとの関係は，かなりすゝんでゐたとしなければならぬ．（マティルデの回想によれば），53年ごろから，だんだん親しくなつていつたのであるが，それが早くも翌年には，いくつかの略語による暗示があつたとはいへ，作品の構想をうながすまでに，その恋愛は深入してゐたのか，どうか．ワーグナーはこのほかにも，複数の恋愛体験があるが，それらのうちで作品にまで昇華したのは，この場合だけである．その点もまた，考慮に入れておく必要があるであらう．

55年1月，ワーグナーは改訂『ファウスト序曲』に，ゲーテの『ファウスト』からの引用をモットーとしてつけるつもりであつたが，それをとりやめ，R. W. Zürich 17. Jan. 55 zum Andenken s. l. F. と書込んだ．s. l. F. のところは，seiner lieben Freundin の頭文字であり，「愛する女ともだちの記念のために，55年1月17日，リヒアルト・ワーグナー」となる．この曲は，2月23日，それはワーグナーがロンドンの旧音楽協会からのまねきでイギリスへ出発する3日まへにあたるが，ワーグナー自身の指揮で演奏された．

秋ごろ，いはゆる丹毒が，頻繁に発病する．12月，ワーグナーは「トリスタン，一そう確実に着想」とメモ（*Annalen*）に書附ける．「一そう確実に」といふのは，1年まへの54年12月に，すでに一おう着想してゐたからである．たゞし，この「一そう確実に着想した」トリスタンは，いま私たちが見る『トリスタン』とは，すこしちがつてゐる．第3幕で，病床のトリスタン

を，パルジファルが見舞ふのである．ワーグナーは重傷をおひながらも死ぬことの出来ないトリスタンを，グラール伝説のなかのアムフォルタスと同一視したのである（『わが生涯』，S. 524）．

56年になると，丹毒は何どもくりかへし発病するので，モンブランのちかくのモルネ（Mornex）の水治療所にゆくと，そこの医者が，（丹毒ではなく），「神経性アレルギー」と診断し，適切な処置をとつた甲斐あつて，病気はぴたりと，をさまつた．8月，ワーグナーはチューリヒにかへり，9月22日には，『ジークフリート』（『わかいジークフリート』から改題）の作曲スケッチにとりかゝる．3月に『ワルキューレ』の総譜完成以来，やく6ケ月の空白のゝちの仕事再開である．このころ，ワーグナーは（チューリヒの）ツェルトヴェク通りに住んでゐたのであるが，すこしまへから，隣りにブリキ屋が移つて来て，ワーグナーはその騒音に大いに悩まされ，しばしば隣りと悶着をおこしてゐる．このさゝやかなる事件は，一見，愚にもつかぬ出来事のやうであるが，見方をかへると，ワーグナーにとつて，2つの大きな意味をもつてゐる．その1は，このブリキ屋への鬱憤が，『ジークフリート』第1幕のジークフリートとミーメとのもめごとの場面の音楽の母胎となつたことであり，その2は，ワーグナーがヴェーゼンドンク家のとなりのしづかな「かくれ家」に引越す原因ともなつたからである．

『ジークフリート』第1幕の作曲は，なかなかおもふやうには，はかどらず，途中，しばしば中断する．中断の理由の1つは，『トリスタン』にもある．12月19日，『トリスタン』の中心となる第2幕の「愛の場面」の音楽的な構想ができあがる．『トリスタン』は，はじめに中心になる音楽から具体的に定着して行つたのである．テキストは，まだ散文稿すら出来てゐない．普通，ワーグナーがオペラをつくる順序は，着想——散文草稿——台本——作曲スケッチ——総譜である．『トリスタン』の成立過程が，ワーグナーのほかのオペラのそれと異なるのは，第1にこの点にある．『トリスタン』のばあひだけが，はじめに音楽があつて，それから台本が追ひかける形となつたのであるが，その理由は何であつたか？　もともと，トリスタンとイゾルデの愛はロ

ゴス（ことば）では，十全にとらへることが出来ない．オペラ『トリスタンとイゾルデ』にあつては，「沈黙」がきはめて重要な役割をになつてゐる．本文のなかゝら，2－3の例をひけば，

イゾルデ「おく病な沈黙，
〔．．．〕
だまつて，いのちを救つてやり
敵の復讐から
だまつて，かくまつてやつた女，
だまつて護つてやり，
幸福にしてやつたのに，
その女と一しよに幸福をすてゝしまふなんて！」（1－3）

トリスタン「沈黙の女王が
私にだまるやうに命じます．
彼女が，だまつてゐても
私にはわかるが
彼女がわからないことを
私は，だまつてゐるのです．」（1－5）

イゾルデ「あなたの言はないことが，私に
はわかります．」（1－5）

第2幕第3場，イゾルデとのあひゞきの現場に踏込まれたとき，トリスタンはマルケ王に，かうした次第になつてしまつた理由を全くはなさない．「あゝ，王さま，そのやうなことは，申上げるわけにはまゐりません．」

『トリスタン』以外のワーグナーのオペラはすべて，ロゴス（ことば）があつて，さうして，パトス（音楽）であるが，『トリスタン』だけがパトスが先行してゐる．こゝに，このオペラの特質がある．

『トリスタン』成立過程の特異性の第2は，このオペラが，『ジークフリート』作曲中に，わり込んで創作されたといふことである．わり込むには，そ

れなりの理由があつたであらう.

ヴェーゼンドンク夫妻は，それまでチューリヒでホテル住まひをしてゐたのであるが，しばらくこゝに落ちつかうと，郊外エンゲのチューリヒ湖を見おろす丘，ワーグナーがのちに「緑ケ丘」(der Grüne Hügel) と名づけた丘のうへに邸宅，それはヴィラ (Villa) とよばれるやうになる豪華な住宅を建てることにし，そのをり，地つゞきにあつた小さな家も買ひとり，これを改造して，ワーグナーに提供した．ワーグナーがブリキ屋の騒音になやまされて，ツェルトヴェク通りの借家から移りたがつてゐたからである．マティルデは旅先のパリから，チューリヒのミンナにあてゝ，「どうか，この家が平安と友情との真のかくれ家でありますやうに」と書いてゐる (57年11月)．い後，この家は「かくれ家」(Asyl) と名づけられた．

ワーグナー夫妻が，この「かくれ家」に引越したのは，4月28日であつた．ワーグナーは『わが生涯』のなかで，この家で目をさました最初の日が，美しい聖金曜日であつたと書いてある．しかし，この年 (1857年) の聖金曜日は，4月10日であつたから，あきらかに事実に反する．それでは，これはワーグナーの単純な記憶ちがひだつたのか．ワーグナーはつゞけて，この日に『パルジファル』を着想したといつてゐるのであるが，ワーグナーは，あたらしい・しづかな住まひでの美しい聖金曜日こそ，聖杯の騎士をあつかつた『パルジファル』を着想するのに最もふさはしい日と思つたのであつたらう．

4月20日，ワーグナー夫妻はツェルトヴェク通りの借家を出て，ホテルに宿泊した．引越先の「かくれ家」は，新築ではなく，改装であるが，まだ工事がをはつてゐなかつたからである．改装なつて，ワーグナー夫妻が，「かくれ家」に入つた4月28日は，さむい・しめつぽい憂鬱な日であつたが，翌日は一転して美しく晴れあがつた．(天気についてだけは，ワーグナーの記述に一致する．)

ワーグナーの書斎は，(日本流にいへば)，2階にあり，仕事机がおほきな窓のそばにおいてあつて，そこからはチューリヒ湖とアルプスの山々が一眸

のもとに見渡せた．まはりは（ブリキ屋のとなりとはちがひ），しづかで，庭はよく手入れされて気持よく，そこには，野菜畑もあり，その世話は，ミンナのワーグナーへの不平をまぎらはすのに好都合でもあつた（57年5月8日，リストあて書簡）．ワーグナー夫妻は，かうして，「かくれ家」に入つたが，ヴェーゼンドンク一家は，まだ引越して来ない，建物が完成してゐないからである．ヴェーゼンドンク夫妻が，緑ケ丘の新居に移つてくるのは，4ケ月先の8月である．

引越をしたころ，ワーグナーは『ジークフリート』第1幕の作曲をゝはりかけてゐた．5月12日，第1幕の総譜完成．すぐに，5月22日から第2幕の作曲スケッチをはじめてゐる．しかし，1ケ月もたゝない6月なかばには，『ジークフリート』の仕事は，とゞこほりがちとなる．ワーグナーの関心が，『トリスタン』のはうにむいて来たゝめである．6月26日，『ジークフリート』の作曲中止．「ジークフリートを（さびしい森の）菩提樹のしたにのこして，涙ながらに別れをつげた」とリストへの手紙に報告してゐる（57年6月28日）．しかし，ワーグナーはかうはいつたものゝ，間もなく，『ジークフリート』をふたゝび取りあげ，8月9日に，一おう，第2幕の作曲スケッチをゝへて，この仕事を中断してゐる．8月20日，『トリスタン』の散文草稿にとりかゝり，そのご，たゞちに台本を執筆し，完成したのが，9月18日．そのために要した時間は，わづかに29日間にすぎない．『トリスタン』と相前後して着想された『マイスタージンガー』には，3つの散文稿，『パルジファル』には，2つの散文草稿がのこつており，これらの作品とくらべてみれば，『トリスタン』のテキストが一気呵成に出来上つたといへる．

（『トリスタン』の散文草稿から，台本完成までの）8月20日から9月18日の間には，ワーグナーにとつて，2つの事件があつた．その1つは，ワーグナーが『トリスタン』にとりかゝつた2日ごの22日に，いよいよヴェーゼンドンク一家が新邸に移つて来たのである．このとき，（ワーグナーは44歳），オットーは42歳，マティルデは29歳であり，夫妻の間には，6歳の長女と2歳の息子，それに4ケ月の赤ん坊（男）の3人の子どもがあつた[1]．

オットーは仕事の関係から留守がちで，マティルデは1人とりのこされることがおほく，そのために，マティルデはワーグナーのはうに傾いていつたのか？　それもないではなかつたかもしれないが，より大きな動機は，ワーグナーのもつ強い磁力だつたとおもはれる．

ワーグナーは背が低く（163センチ），頭が大きく，ザクセンなまりがひどく，全く風采があがらなかつたといはれてゐる．それなのに多くの女性をひきつけたし，女性ばかりでなく，大勢の同性の崇拝者が，まはりに集つた．それは，単なる「才能」からだけではない，精神的な高さ，乃至は，ひろさから来るところの人間的な魅力であつたであらう．

マティルデはこのやうなワーグナーにすつかり魅了された．もつとも，残つてゐる資料は，ワーグナーの側からのだけであり，マティルデが，はたしてどれだけ，ワーグナーに心ひかれてゐたかは，わからない，といふ見方もある．しかし，2人のあひだは，当時，世間のうはさにのぼつたのであり，それをふまへての後年のマティルデの回想（*Erinnerungen*, 1896, Allgemeine Musik-Zeitung）などを読んでみると，マティルデがワーグナーに傾倒してゐたのは，確かである．一たい，ワーグナーに「かくれ家」を提供するやうにと，オットーをつよく説得したのは，マティルデであつた．ワーグナーはワーグナーで，数々の頭文字からなる暗号が証明してゐるやうに，この知性ゆたかな，美貌の夫人に大いに魅力を感じてゐたのであるから，かうした2人が，隣合せ，といふよりは，1つ屋根の下に住んでゐるといつたはうが，より適切なやうな環境になり，2人の親密度は一だんと増していつた．

もう1つは，コージマがハンス・フォン・ビューローと新婚旅行の途中，「かくれ家」を訪ねて来たことである．ビューローは7年まへの1850年に，ワーグナーのすゐせんで，こゝチューリヒの市立劇場の指揮者となり，音楽家としての第1歩をふみ出したのであつたが，間もなく，この劇場のプリマ・ドンナと衝突して，この職をのき，ワイマルに行つて，リストの弟子となつたのであるが，いまそのリストのむすめコージマと結婚して，旅行中なのである．ビューロー夫妻は，チューリヒに来ても，はじめホテル（Gasthof

zum „Raben“）に泊つてゐたが，ワーグナーが自宅に招待したので，9月5日に「かくれ家」をおとづれ，28日まで，3週間とすこし，こゝに逗留してゐる．そのあひだに，ミンナ，マティルデ，コージマといふワーグナーをめぐる3人の女性が，しばしば同席する機会があつた．

この年の9月は，活気にみちて過ぎた，とワーグナー自身がいつてゐるが（『わが生涯』，S. 566），さうした中で，9月18日，『トリスタン』の台本が完成．

「去年のけふ，私はトリスタンの台本を完成し，最後の幕をあなたのところにもつて行きました．あなたは私をソファのまへの椅子にみちびき，私を抱擁して，いひました，『これ以上，わたし何の望みもありませんわ』この日，このとき，私はあらたに生れたのです．——そのときまでは，私の前生でしたが，いまや，私の後生がはじまつたのです．．．やさしい女性が，おづおづと，ためらひながらも勇敢に，苦痛と苦悩の海の真只中に，身を投じました．私にこの素晴しい瞬間をあたへてくれるために，わたしは貴方を愛します，と私にいつてくれるために．——かうして，あなたは死に身をさゝげました，私に命をくれるために．私はあなたの命を受けとりました，いまや，あなたとゝもに，この世からわかれ，あなたとゝもに悩み，あなたとゝもに死ぬために．．．」

これは，『トリスタン』のテキスト完成から，丁ど1年後のワーグナーの日記の1節であるが，当時の様子をよく伝へるものとして，しばしば引用される．ついでにいふと，この「日記」は普通のそれとはすこしちがひ，すべてマティルデへの手紙形式で書かれてゐる．日づけは，58年9月21日から翌59年4月4日まで，ワーグナーがチューリヒを去つてから，主としてヴェニス（ヴェネツィア）で書いたので，一ぱんには，「ヴェネツィア日記」（*Venezianisches Tagebuch*）といはれてゐる．

この「日記」はその都度（日づけ毎に）マティルデにわたされてゐたのではない．58年9月2日に，ワーグナーは実際にマティルデに手紙を送つたが，それは開封されぬまゝ返送されて来た．マティルデがこの「日記」をよ

んだのは，書かれてしばらくたつてからである．

かうして，『トリスタン』は台本完成直後に，マティルデにさゝげられた．それは9月18日であり，このとき，ビューロー夫妻は，なほ，「かくれ家」の客であつた．ワーグナーの家では，この新婚のお客を歓迎する意味もあつて，音楽会が催され，ビューローが『ワルキューレ』からの抜萃曲をピアノで伴奏し，ワーグナーが歌つたりもした．また，朗読会もあり，ワーグナーが『トリスタン』を読みあげたときには，その最終場面（「イゾルデの愛の浄化」）にマティルデが極端に感動したので，ワーグナーが，こゝはそんなに悲しい場面ではない，と彼女の気持をしづめてやつたこともあつた．

9月28日，ビューロー夫妻は，「かくれ家」を跡にしてベルリンへ旅立つたのであるが，ビューローは，ワーグナーが以前とはすつかり変つて，神々しいばかりになつたやうに思ひ，それをキリストの変容をあらはす Verklärung といふ言葉を用ゐて表現してゐる（Gregor-Dellin: *R. Wagner*, S. 426）．

9月18日に台本が出来上つたのち，ワーグナーは，たゞちに，10月1日からこの作品の作曲をはじめる．その間，わづかに2週間にもたりない．ワーグナーのばあひ，台本完成と作曲開始とのあひだに，もう少し時間があるのが，普通である．たとへば，『ローエングリーン』は1845年11月に（初稿）台本完成，作曲開始が46年5月であり，『マイスタージンガー』は1862年1月すゑに台本清書，序曲の作曲着手が3月をはりであり（この作品の作曲は，大へん手まどつて，1867年10月までかゝる），『パルジファル』は台本が1877年4月に出来，第1幕の作曲に取りかゝつたのは，9月である．『トリスタン』の作曲はその後も順調にすゝみ，12月31日には，第1幕の作曲スケッチをゝはり，翌58年4月3日には第1幕の総譜が完成してゐる．このやうな仕事の進捗ぶりは，この作品構想の「爆発力」を証明してゐる，といふ見方もある（ヴェステルンハーゲン『ワーグナー』，白水社，321頁参照）．

ワーグナーは『トリスタン』の仕事をすゝめながら，マティルデの書いた詩に作曲もしてゐる．その詩とは，「天使」（Der Engel），「夢」（Träume），「苦しみ」（Schmerzen），「とまれ」（Stehe still），「温室にて」（Im Treibhaus）

の5編である．まづ，11月には，「天使」が，12月には，「夢」と「苦しみ」が，そして翌58年2月に「とまれ」，5月に「温室にて」が作曲された．その中でも，「夢」と「温室にて」の2曲は，のちに，「トリスタンとイゾルデのための習作」(Studien zu〉Tristan und Isolde〈) と名づけられたやうに，『トリスタン』に1部利用されたところもある．

先にもいつたやうに，『トリスタン』といふ作品は，台本執筆の期間がみじかゝつたが，作曲のはうも渋滞なく，どんどんすゝみ，57年12月31日には，第1幕の作曲スケッチが完成．ワーグナーはそれにつぎのやうな詩[2]をそへて，マティルデに献呈してゐる．

幸福にみちあふれ
苦しみから離れて
とらはれずに，ひたすらに
永遠にあなたのもの——
あの2人が歎きあひ
誓ひあつたこと，
トリスタンとイゾルデ，
清らかな金の響にのせて，
彼らの涙と接吻とを
あなたの足許にさゝげます，
私をこんなにも高めてくれた
天使を彼らがほめたゝへてくれるやうに，と！

ところで，ワーグナーとマティルデが，かうまで親しくなると，人目につかないわけがなく，当然ながら，2人の仲は世間のうはさにのぼつた．58年早々のメモ（*Annalen*）に，「隣家の紛糾」とワーグナーは書込んでゐるが，このころから，ヴェーゼンドンク夫妻のあひだには，ギクシャクしたものが表面化してくる．しかし，以後もオットーは Mäzen（保護者）としての立場をまもり，それまでどほり，ワーグナーに経済的な援助をつゞけてゐる．（ワーグナーとヴェーゼンドンク家との交際は，ワーグナーが「かくれ家」を

去つてからも変らず，ワーグナーの死後までも，夫妻はバイロイトと接触をもつてゐた.）この点，ジェシー・ロソーとの事件のときに，ワーグナーを射殺してやる，といつた夫ウジェーヌとは，大いにその態度を異にする．一方，ミンナはマティルデに，はげしく嫉妬した．ワーグナーは，ほとぼりがさめるまで，しばらくこゝをはなれてゐるのがいゝと判断し，58年1月15日，パリに遊び，やく3週間そこにゐて，2月のはじめに，チューリヒにかへつてゐる．

そのころ，マティルデはイタリア人（工科大学講師）フランチェスコ・デ・サンクティス（Francesco de Sanctis）にイタリア語を習つてゐたのであるが，ワーグナーはこの家庭教師をきらつた．ワーグナーはこのわかいイタリア人に，自分の恋敵を嗅ぎとつたのである．4月5日，ヴェーゼンドンク家の居間で，ワーグナーがマティルデと話してゐるところへ，サンクティスと（あのドレスデン暴動のをりの戦友）ビーバーシュタインとが入つて来たので，ワーグナーは気分を害して自宅にかへつて了つた．ワーグナーとマティルデとは，手入のよくゆきとゞいた・快適な庭で話すのを好んだのであるが，翌6日，マティルデは，天気がわるかつたので，庭に出て来ず，話が出来なかつた．夕方，ヴェーゼンドンク家をたづねたとき，ワーグナーは昨日からの気持のつゞきで，いらいらしてゐたゝめに，さゝいな原因から，つい言合ひとなつた．

4月7日あさ，ワーグナーはベッドから出るなり，すぐにペンをとつて，昨夜の大人気ない態度をわびる「朝のさんげ」を書き，その手紙を『トリスタン』第1幕への前奏曲の楽譜にそへて，庭番の召使にマティルデのところに持つて行くやうに命じた．彼がそれをもつて，庭を横切つてゐたとき，ミンナがそれに気づいて，庭番をよびとめ，そのてがみをとりあげて了つた．ミンナはこの手紙を，2人の関係のうごかぬ証拠物件とみなして，いきまいた．

かうして，問題のてがみは，マティルデにはとゞかず，ミンナの手許にのこつたので，ながいあいだ，一ぱんには読むことが出来なかつたのである

が，ミンナの死後，まはりまはつて，いまはアメリカのカーティス音楽院の所有となり，ワーグナーの書簡集にも入り，だれでも読めるやうになつた．

読んでみれば，何ほどのこともない．昨夜（4月6日夕），たまたまゲーテの『ファウスト』が話題となつたをり，マティルデが，ファウストは，いまゝでに作家が創つたうちで最もすぐれた人間タイプである，といつたのに対し，ワーグナーは，ファウストを夢想家の学者にすぎない，と反論した．グレートヘンの場面こそ，ファウストが幸福と救ひとを学ぶ絶好の機会であつたにもかゝはらず，ファウストはその機を逸し，最後までそれを歎かねばならなかつた．このやうなファウストを，人々は人間典型の1つの理想家と誤解してゐるといふのである．

しかし，昨夜の態度は大人気がなかつた．「天気もいゝやうです．けふ，私は庭に出ます．あなたをお見かけしたら，すこしのあひだ，だれにも邪まされずに，お会ひしたいものです．——どうか，私のたましひを全部，朝の挨拶として受けとつてください」と，この手紙は結ばれてゐる．このをはりの部分あたりが，とくに，ミンナの癇にさはつたのかもしれぬ．

この事件は4月7日，そして，1週間ごの4月15日，ミンナは心臓治療のため，ブレステンベルク（Brestenberg am Hallwiler See）へ出発する．療養先のミンナへのワーグナーのてがみは，「愛する可哀さうなミンナ！　もう1ど，いひます，何回でも繰返します，辛抱して下さい，何よりもまづ，信頼して下さい！．．．」と始まり，「あなたの1日も早い恢復を，心から切に祈つてゐることは，神さまが証人です．頑張つて下さい！　病気がよくなれば，一切をもつと冷静に見ることが出来るでせう．人生の悩みの原因は，私たちの外側にだけあるのではなく，大抵は，私たちの内側にもあるものだからです．それでは，恢復を祈ります．間もなく，お目にかゝれますやうに．あなたの，誠実な夫，リヒアルト」といふことばで，しめくゝられてゐる（58年4月23日）．

しかし，ミンナの心はほぐれず，またマティルデもこれ以上ミンナとあひたくないといつてゐるとヴィレ夫人からきいて，ワーグナーの心はきまつ

た.

8月17日（火曜日），ミンナは黙つてワーグナーに朝食とお茶の用意をした．それから彼女は馬車でワーグナーを駅までおくる途中，彼の手をとつて，涙と接吻とでそれを覆つた．「雲1つない，よく晴れた夏の日であつた．」(『わが生涯』，S. 584）かうして，ワーグナーは「かくれ家」を去り，汽車でジュネーブにむかつた．そこからは，カール・リッターが同行して，ローザンヌ，ミラノなどをとほり（ミラノではレオナルドの『最後の晩餐』を見て），29日，ヴェニスに到着．こゝで，ハンガリー人の家主から家具つきの部屋をかりて，ワーグナーは『トリスタン』の作曲をつゞける．

ミンナは，しばらくチューリヒにとゞまり，「かくれ家」たちのきの後始末をしたのち，9月2日，チューリヒをはなれ，生れ故郷のドレスデンにかへつた．その際，ミンナはマティルデにあてゝ，1通のてがみをのこして行つてゐる．

「私は出発まへに，あなたが，22年の結婚生活のすゑに，私の夫を私から引離すことに成功なさつたといふことを，血の出る思ひで，申上げなければなりません．どうか，この高貴な行為が，あなたの満足と幸福とに役立ちますやうに！」

ワーグナーとマティルデとの恋愛の特徴は，何であつたか？　ワーグナーには，マティルデとのほかにも――それも人妻とのいくつかの恋愛事件がある．それとくらべて見ると，マティルデとの場合は，とにかく，暗い．マティルデ事件をはさんで，数年まへのジェシー・ロソーとの駈落未遂，数年ごのコージマとのスキャンダル，いづれもマティルデとのときほど，暗くない．たとへば，『トリスタン』台本完成の日，ワーグナーがそれをマティルデのところに持つていつたをりの様子は，（まへにも引用した「日記」の1節によれば），

「かうして，あなたは死に身をさゝげました，私に命をくれるために．私はあなたの命を受けとりました，いまや，あなたとゝもに，この世からわかれ，あなたとゝもに悩み，あなたとゝもに死ぬために．．．」

ワーグナーは，姉クラーラへの手紙のなかで，マティルデはこのとき，„nun sterben zu müssen“ といつた，と書いてゐる（58年8月20日）．なぜ，2人の愛は，こんなにも厭世的なのか？　ワーグナーもマティルデも，お互に結婚してゐる身であり，2人の愛は八方ふさがりだつたからか？　それならば，ジェシー・ロソーとのときは？　さうして，コージマとのときは？どの場合も結婚してゐる者同士の恋愛であり，情況は同じではないのか？それなのに，このばあひだけ，どうして，こんなにもペシミスティクなのか？

それは，ショーペンハウアを読んでゐたから，といふのが，その設問への1つの解答になるかもしれない．しかし，ワーグナーの死へのあこがれが，ショーペンハウアを手にする以前からのものであること，すでにくりかへし述べたとほりである．さうすると，この死と一体の愛は，これもまた，ワーグナーのそのころの死への願望のあらはれの1つといつてもいゝであらう．マティルデのもつてゐた死の思ひは？　マティルデにおいては，ワーグナーからの感化，あるいは，ワーグナーのそれへの共感にほかならなかつたであらう．

（5）

以上の点から，ワーグナーとマティルデの愛にも，この時期のワーグナーが落込んでゐた「うつ」状態が反映してゐたことがわかる．

1854年秋，「うつ」真只中のワーグナーは，ヘルヴェークが持つて来たショーペンハウアの『意志と表象としての世界』をよみ，そこで，はからずも，自分にもよく把握出来なかつたところの，いまの沈んだ気持と，うまく共鳴する内容にゆきあつた．ワーグナーはこの本にひどく興味をもち，1年間に4回もくりかへして読んでゐる．大たい，「うつ」状態のときには，いふまでもなく，行動は消極的となる．ショーペンハウア読書に際して見られるやゝ積極的な態度は，ワーグナーの「うつ」状態からの脱皮の兆候の第1歩だつたとも見られるであらう．

ショーペンハウアのつぎに来るのが，『トリスタン』の着想と執筆である．『トリスタン』成立の3つの特異点——それは，(1)まづ，音楽から，(2)『ジークフリート』作曲の途中に，わり込んで，(3)一気呵成に，製作されたことである．ワーグナーはリッター夫人への手紙に（57年7月4日），「ジークフリートを1年間，森のなかに残しておく，『トリスタンとイゾルデ』で憂さばらしするために」と，いつてゐる（Glasenapp: *Das Leben R. Wagners*, Ⅲ, S. 151）．こゝで，ワーグナーが，はからずもゝらした「憂さばらし」(sich Luft machen）といふ言葉からもわかるやうに，『トリスタン』はワーグナーの「うつ」からの恢復に是非必要だつたのである．一ぱんに「作業療法」といふものがあるが，それにならつて名づければ，これは「執筆療法」とでもいへばいゝのか．とにかく「執筆」を通じて，ワーグナーは徐々に「うつ」状態から脱して行つたのである．そのためには，いまゝでの仕事の継続ではなく，気分一新のために，新しい仕事でなくてはならぬ．『ジークフリート』作曲を中断する1つの理由である．題材は，いまの気持にふさはしいもの，いまのこの気持——生きてゐるのを忘れたいやうな気持，それを托するのに最も適した素材として，ワーグナーはトリスタンとイゾルデの物語をえらんだ．たゞし，元来は，この物語，単なる哀切な愛と死の物語にすぎなかつたのであるが，ワーグナーがそのときの自分の気持であつた「死へのあこがれ」をその中にもち込んで，さうすることによつて，現にある自分の死への願望を中和して行つた．

「うつ」といふやうな——とくに，程度の差こそあれ，誰にでも見られる初老期の「うつ」といふやうな心のマイナス状態からの恢復には，論理よりは，感性こそ有効である．ワーグナーの作業も，感性が先行する．『トリスタン』は，まづ，音楽から成るのである．さうして，一たん，はじめられた作業は，停滞してはいけない．停滞しては，恢復のたすけにはならない．大事なのは，没頭である．没頭してこそ，マイナスをプラスに転ずる力となるのである．『トリスタン』が爆発するやうに一気呵成に出来上つた理由も，こゝにある．『トリスタン』の台本が完成した直後，57年9月，ハンス・フォ

ン・ビューローは，(まへにも述べたやうに)，ワーグナーに「神々しい変化」(eine Verklärung) を認めてゐる．『トリスタン』を書くことによつて，それまでの「うつ」から脱して，ワーグナーは変つたのである．

コージマの日記によれば (72年3月14日)，ワーグナーは，後年，マティルデとの恋愛にふれて，あのとき，お互に離婚して，2人は結婚しようではないか，とワーグナーがマティルデに持出したことがあつた．マティルデは，「それは神聖冒瀆 (Sakrilegium) だわ」と応へたが，とにかく，この (Sakrilegium といふ) むづかしい単語は，ワーグナーの提案にふさはしかつた．ワーグナーは，こゝろのそこでは無意識に，それを真剣におもつてゐなかつたからである．

この記述は，ワーグナーがコージマに話して，コージマが書いてゐるのであるから，ワーグナーは，もちろん，マティルデとの関係をあまり深いものとはいひたくなかつたのであり，その点を割引して読まねばならない．にもかゝはらず，こゝには，マティルデ事件の1つの側面があらはれてゐると，わたしは考へる．ワーグナーとマティルデとが，普通の意味において，結婚することは，あり得ない．それは，トリスタンとイゾルデとが，この世で結婚することが，あり得ないのと同様である．

ハイネマン (Karl Heinemann) は大著『ゲーテ』(*Goethe*) のなかで，ヴィレマー夫人と『西東詩集』の「ズライカ書」とのかゝはりあひについて，「マリアネ・フォン・ヴィレマーに恋慕したからゲーテが『ズライカ書』を書いたのではなくて，彼が詩的興奮の気分にあり1人のズライカを必要としたからこそ，たまたま彼の圏内に入つて来たあの才媛が彼のため恋愛と詩作の対象になつたのである」(『ゲーテ伝』4，99頁，岩波文庫) と，書いてゐるが，マティルデと『トリスタン』のばあひにもおなじ関聯が指摘出来る．ワーグナーが詩的興奮の気分にあり，1人のイゾルデを必要としたから，たまたま，ワーグナーの近くにゐた美貌の人妻が，ワーグナーの恋愛と詩作の対象となつたのである．まへにもふれたやうに，54年夏，それはマティルデと知合つて1年半ほどのちであるが，ワーグナーが『西東詩集』によみ

耽つたのは，これら2つの作品へのそれぞれの女性の関与の類推を，より一そうかきたてる．

ショーペンハウアを読み，マティルデ・ヴェーゼンドンクとの恋愛があつたから，『トリスタン』が成立した，といふやうに，一ぱんにはいはれてゐる．わたしの見方は，それとは，やゝ力点のおき方がちがふ．

マティルデとの恋愛があつたから，ワーグナーがトリスタン伝説の作品化を思立つたのではなく，すでに早くドレスデン時代（1843—49）のワーグナーの蔵書に数おほくのトリスタン文献（中高ドイツ語版，現代語訳のほかにも，古代フランス語，英語，スペイン語版など）がふくまれてゐることからもわかるやうに，この題材は，ワーグナーのなが年の腹案だつたのであり，また，『トリスタン』を書くために——つまり，作品のために，マティルデを恋したといふ風な「藤十郎の恋」でもない．

ショーペンハウアの偶然の入手とそれへの耽溺が導火線となつて，『トリスタン』の着想，執筆とつゞく．その執筆作業が「うつ」といふ殻からの着実な脱皮の過程であつた．マティルデとの恋愛は，この作業へ「はずみ」をつける役割をはたしたのである．

注

1）オットーとマティルデ・ヴェーゼンドンクとのあひだの子どもは，次のとほり：1ばん目のをとこの子は，1849年に生まれたが，4ケ月で死亡，以ご，51年にMyrrha，55年にGuido（58年10月死亡），57年にKarl，62年にHans（82年死亡）が誕生．

2）この詩は，『西東詩集』のなかのズライカの詩の1つを，ふまへてゐるであらう．ともに „Hochbeglückt . . .“ と，はじまつてゐるし，その内容も類似する．

Richard Wagners Weg zum *Tristan*

Yoshihiro Ito

Es wird allgemein angenommen, daß R. Wagners Oper *Tristan und Isolde* aus zwei Erlebnissen, aus der Begegnung mit Schopenhauers Philosophie und aus der Leidenschaft für Mathilde Wesendonck entstanden sei. Aber man könnte das auch anders sehen.

In jener Zeit arbeitete Wagner weniger als früher, und er war des Lebens müde. Nun war er an die Vierzig und vermutlich in eine prä-senile Melancholie geraten. Gerade da lernte er durch seinen Freund das Hauptwerk Arthur Schopenhauers kennen. Dessen Gedanke einer Verneinung des Willens zum Leben war für Wagner nichts Neues. Aber er empfand große Sympathie für den Pessimismus, da er selbst in der Einsamkeit lebte und Sehnsucht nach dem Tod spürte. Er wurde nicht erst durch die Lektüre des Schopenhauerschen Werkes pessimistisch, sondern war das schon seit jeher.

Als nicht minder wichtig für Wagner in seiner Züricher Zeit ist die Zuneigung zu Mathilde zu veranschlagen. Doch er schrieb das Musikdrama *Tristan* nicht darum, weil er sie liebte, oder er liebte sie nicht so sehr, um das Werk zu konzipieren. Die Gestaltung des *Tristan* war für ihn das Genesen von der Melancholie. Wagner war eben in einer Stimmung dichterischer Erregbarkeit und fand in Mathilde die Frau, die ihn als Muse beflügelte. Die Beziehung Wagners zu Mathilde wird wohl mit der Goethes zu Marianne Willemer zu vergleichen sein. Aus dieser ist das „Buch Suleika" im *Diwan* geworden, aus jener die Oper *Tristan und Isolde.*